

4000万人の頭痛

85

頭痛にまつわる都市伝説

第5回 年を取れば頭痛は治る？

文 清水俊彦

text by Toshiko Shimizu

頭痛で医療機関を受診しても、年を取れば治るから心配せずにそのまま市販の頭痛薬を使って痛みに対処していればよいと言われ、まともに取り合ってもらえなかったという、患者さんの声を耳にすることがあります。

もしここでいう頭痛が慢性頭痛の中でも代表的な片頭痛のことを指しているならば、ある意味これは正しいと考えられます。片頭痛発作の際には脳血管が異常に拡張し、血管周囲の三叉神経を刺激してその刺激情報を大脳が痛みとして認識するのですが、脳血管も年を取れば動脈硬化を起こして硬くなり、そうは簡単に広がらなくなるため、結果三叉神経から大脳への情報入力が減少し、痛みが少なくなるのです。

しかし痛みからは解放されても、過去の頭痛発作のたびに異常な刺激情報を読み取っていた大脳は、少しの刺激でも過剰に反応する、ある意味蓄えられたエネルギーを放出するような状態に陥り、怒りっぽい、気性が激しくなるなどの性格変化や、大脳の情報処理が上手に行えず、健忘症や見当識障害などの高次脳機能障害の結果、あたかも認知症のような症状を来たすことすらあるのです。このような状態で医療

機関を受診し、十分な検査を行わずに認知症の治療薬を処方され服用すると、更に脳の過敏な状態が助長されてしまうことがあり、注意が必要です。

大脳は機能亢進と機能低下の真逆のことが起こっていても、見かけの症状が似通っていることがしばしばあり、従って治療薬も全く異なるため、複数の検査で大脳機能を十分に精査したうえで適切な治療薬の処方が必要なのです。安易な抗認知症薬の処方逆により症状を悪化させることすらあるのです。

数ある頭痛の中でも、若年者ではあまり発症せず、むしろ高齢者に多く発症し、極めて診断の難しい側頭動脈炎という疾患があります。この頭痛は頭部の皮膚や筋肉など主に頭蓋骨の外側を栄養している浅側頭動脈という動脈が自己免疫性の炎症を起こして閉塞してくる結果、側頭部やこめかみに拍動性の痛みや圧痛を伴うことが多く、片頭痛と誤って診断されることもありま

どの自己免疫病の家族歴や既往症がある際には注意が必要です。

心配のない頭痛や単に頭痛という診断はあり得ないと認識すべきでしょう。

Profile

日本脳神経外科学会認定医、日本頭痛学会監事を歴任。日本頭痛学会認定専門医。東京女子医科大学病院脳神経センター頭痛外来客員教授、獨協医科大学神経内科学講座臨床准教授、一般社団法人グリーンケアパートナー理事。

ほかに、汐留シティセンターセントラルクリニック、阿見第一クリニック、小山すぎの木クリニック、マミーズクリニック、伊豆大島医療センターの頭痛外来を担当。

昭和61年3月日本医科大学卒業。学会活動をはじめ、NHK「きょうの健康」「クローズアップ現代」など、テレビ出演も多い。「頭痛女子のトリセツ」（マガジンハウス）をはじめ、頭痛関連の著書多数。



新刊「マンガでわかる頭痛・めまい・耳鳴りの治し方」
監修/清水俊彦 推薦/佐渡島庸平
新紀元社 (1,080円(税込))販売中。